

青柳周一ほか 編著 『江戸時代近江の商いと暮らし 湖国の歴史資料を読む』

おうみ学術出版会 /
サンライズ出版(発売)
2016年、315pp.

水本邦彦
Kunihiko Mizumoto
京都府立大学 / 名誉教授
長浜バイオ大学 / 名誉教授

本書は近江商人研究の第一人者にして、長らく滋賀大学経済学部の附属史料館の運営に当たられた宇佐美英機氏の退職を機に、同僚、同学の人々によって編まれた論集である。「近江の商人」「地域の暮らし」という二つの角度から、江戸時代の近江人の生業や暮らしぶりが、丹念な史料の読み解きを通じて描き出されている。以下、収録された十二編の論考について紹介し、感想を記す。(なお、うち五編に付けられた副題は省略した。)

巻頭の「離島で果てる(宇佐美英機)」は、安永六年(一七七七)の愛知川用水争論の首謀者として壱岐島に流された、神崎郡築瀬村猪田清八の足跡をたどったものである。家族のもとに届いた牢内や流刑地からの手紙という稀有な史料を読み解きながら、彼の商いへの意欲や子への諭し、赦免の期待、最後の悟りなど、過酷な運命のもと波乱の人生を送った一商人の島での暮らしや思いが克明に跡付けられる。

「近江日野商人正野玄三家と日野売薬の展開(本村希代)」は、日野商人の売薬業と売薬をテーマとする。前半では日野売薬の起業者・正野玄三の行商時代、売薬業への転身の様子が跡付けられ、家訓に込められた彼の思想が分析される。後半では、売薬を中心に全国展開を果たした日野商人の販売スタイルや、製造業をも重視する日野商人の特色がわかりやすく述べられる。

「近世期における近江日野商人山中兵右衛門

家御殿場酒店の経営(鈴木敦子)」は、寛政期に駿河国御殿場に酒店として開設された山中家の支店が対象である。地元村名主から酒造株を譲り受けての創業の経緯や、複式帳簿の形をとる決算書「勘定細見帳」から窺える経営の実態、他の支店からの商品の仕入れ、遠隔地からの米の買い付け、日野本家からの融資と本家への為登金など、当店の経営構造が多面的に描かれる。

「近江商人の出店経営と閉店への経緯(青柳周一)」は、仙台を始め全国に多数の出店、枝店を持った中井源左衛門家の店の中から、陸奥国宇多郡の相馬店を取り上げ論じている。質屋と古手・繰り綿・木綿を扱う商圏の仙台藩領にまで及ぶ同店の広がり、領主による上納金賦課や天保飢饉の影響を受けての経営悪化、得意先との貸付金返済訴訟など、相馬店の出店から閉店までの経緯が丁寧にたどられる。

「奥州瀬上宿・近江屋与十郎家の同族関係と経営(荒武賢一郎)」は、陸奥国信夫郡瀬上宿を中心に展開した近江八幡出身の近江屋一族の商業活動を題材にする。酒造業を中心に代官所出入り商人として活躍した与十郎家、百姓仕事にも従事しながら木綿・小間物・酒造商売を営んだ惣十郎家、与十郎家から独立し福島に出店した三十郎家。三家の関係を対象にすることで、近江商人の同族的連携・協力の様子が浮かび上がる。

「近江八幡市域の商家にみる諸儀礼について

(桂浩子)」では、蝦夷地で場所請負経営を担った西川伝右衛門家と、仙台・大坂に支店を構えた谷口兵左衛門家の多彩な人生儀礼が紹介される。妊娠・出産、成長に応じた諸儀礼、婚礼、そして法体から葬儀へ。「初下り」など近江商人ならではの儀式も取り上げられる。商家の生業が、さまざまな儀礼を随伴しながら営まれた様子がよくわかる。

「近世の米取引を支えた商秩序(高槻泰郎)」は、寛政五年(一七九三)、大坂米仲買米屋助次郎(訴訟人)と水口商人小豆屋又兵衛(相手方)との間の、米代金未払い紛争を事例にして、出訴から和談に至るまでの経過を跡付けたものである。訴状の分析を通じて、米切手取引の具体相が示され、和解成立にいたる過程で領主権力(京都町奉行所)の判断が大きな影響力を持ったことが明らかにされる。

以下「地域の暮らし」に入る。「琵琶湖の船株(東幸代)」は浅井郡月出村の史料を用いて、月出浦の船株(七株・七艘)の性格や船株所持の意義、月出浦と塩津浦など他浦との関係について論じている。船株に納浦株と弟株の二種があったこと、浦々の船株が持つ縄張りの荷積み慣行、村内無株者の舟運活動の拡大と規制の様子などが語られる。塩津浦と、長浜や近江八幡・守山・矢橋・大津・堅田・和邇を結ぶ航路も興味深い。

「米原湊の車早船(岩崎奈緒子)」は、天保一一年(一八四〇)米原湊で開発され、米原-大津間の旅客輸送船として就航した外輪船に関する研究である。米原湊船年寄長太夫と京都在住の兄庄助の考案・工夫によったこと、乗員五人・乗客二五人乗りであったこと、経営権をめぐる出資者四人と米原船持ち仲間との対立、彦根藩の手厚い保護など、江戸時代、全国で唯一営業運行した外輪船をめぐる諸相が描かれる。構造図も掲げられている。

「彦根藩領近江国松原村の社会構造と米宿の機能(渡辺恒一)」は、彦根城下に隣接し、村内に松原湊を含んだ松原村が対象地である。同村の空間構成や住民組織の構造を詳細に復元したうえで、藩の松原御蔵の管理や年貢米出納に果たした松原村の役割を論じる。船持や御蔵出入りの村人、米宿の分析を通じて、彦根藩領の湖上交通・物資流通・軍事の拠点であった松原湊と松原村の姿がリアルに浮かび上がる。

「彦根藩郷士と地域社会(母利美和)」は、彦根藩領南筋支配の一翼を担った郷士四家のうちの一家、蒲生郡今堀村の山本家を事例に、彦根藩郷士の実態が分析される。その役割としては、郷中目付として郷中百姓の監察、他領との紛争に際しての折衝、彦根藩に下賜された鷹場の管理など、さまざまなものがあつた。郷土論を深めるうえで、村内宮座と山本家の位置関係をめぐる争論も重要である。

「枝郷塚本村独立宣言(川島民親)」は、神崎郡川並村の枝郷塚本村に焦点を当て、村としてのまとまりや地域社会における役割について検証した論考である。共有文書を読み込みながら、祭礼行事をめぐる裁判や当屋に関する経緯を手掛かりに、同村の独自活動が描き出される。祭りの鳴り物にも塚本村の個性が見られるという。地元への深い愛着が感じられる。

以上、収録された論考を紹介した。近江人の広域に及ぶ商業活動とその浮沈、琵琶湖舟運にまつわる慣習や工夫、地域社会の運営や自治的活動など、江戸時代の近江人・近江社会が育み発揮した力強い姿が、丹念な史料の読みと平易な文章を通じて活写されている。滋賀大学、滋賀県立大学を中心に進められてきた分厚い近江研究に立脚した作品群と言えるだろう。創設された「おうみ学術出版会」の第一作にふさわしい力編と評したい。